

品詞分類の影に隠れた一般化

石塚政行

noitartsinimda@gmail.com

キーワード：バスク語 品詞分類 形容詞 コピュラ文 比較構文

要旨

伝統的な品詞分類、すなわち語をその分布によって少数のカテゴリーに分類することには、原理的な問題がある。異なる文法的基準を満たす語の集合同士が、重なり合いつつも完全には一致しないというのが普通の言語事実であり、そのような条件のもとで厳密に分布分析を適用すれば不可避免的にカテゴリーの数がふくれあがる。これに対する一般的な解決、すなわち一部の文法的基準を重視することは、恣意的なものになりがちである。それだけでなく、そのような品詞分類を無思慮に適用することはしばしば微細な一般化、品詞横断的な一般化を覆い隠してしまう。

バスク語の品詞分類においても同様の問題がある。この論文では品詞分類によって覆い隠されてしまった次の2つの一般化について述べる。(1) バスク語のコピュラ文の述語的補語は、個体レベルか場面レベルかによって形式が異なる。個体コピュラ文の補語は連体修飾句、場面コピュラ文の補語は連用修飾句あるいは描写の二次述語に対応する。(2) バスク語では、普通は形容詞や副詞が持つ比較級形が、名詞、後置詞、動詞にも適用される。比較級形の可否は語の意味に程度性があるかどうかにかかっている。

1. 品詞分類とその問題

複合的表現、すなわち、いくつかの記号的単位に分解できる言語表現を用いることは、私たちの普通一般の言語使用の重要な特徴である。複合的表現とそれを構成する単位との関係をどのように捉えるかは、理論によってさまざまに異なる。伝統的な捉え方の一つは、複合的表現を構成する単位となる基本的項目の集合（語彙）と、それらの組み合わせを規定する規則の集合（文法）の対として言語を捉える「辞書＋文法書」モデルである（Taylor 2011: 19）。このような見方では、全ての語（語彙素）はごく少数のカテゴリーに分けられ、そのカテゴリーを参照して規則が記述される。このカテゴリーが品詞である。

語を品詞分類する際の基準となるのは、その語がどのような分布をするか、どのような統語機能を担うか、どのような文法素性（性、数、人称など）を持つか、といった文法的特徴である（Schachter 1985）。語の統語機能や文法素性は、それが現れる文法的パターンによって確かめられるものであるから、結局、品詞分類とは語の分布分析に基づく分類であると言える。

この意味での品詞分類の問題の1つは、それが分布分析に基づくことによるものである。以下ではこの問題について概観する。

1.1 分布分析の根本的問題

品詞分類にとって、分布分析に基づくこと自体が非常に重大な問題となる (Croft 2001: 34-40)。分布分析の直面する最大の困難は、異なる文法的基準を満たす語の集合同士が、一部が重なりつつも完全には一致しないことがよくある、という Bloomfield (1933: 269) も指摘している事実である。この問題を扱った最近の研究の例として、梅谷博之 (2013) を見てみよう。梅谷は、モンゴル語研究で伝統的に名詞・形容詞・副詞として分類されて来た語群を、5つの基準を用いて B~M の 12 に分類した (表 1)。表中の「語幹形」とは、音形のある屈折接辞が付かない語幹そのままの形のことである。また、基準 1「屈折の種類」について、II を丸括弧で囲ったセルは、そのパラダイムに欠落があることを示す。

表 1. 梅谷 (2013) の 5 つの基準によるモンゴル語の語彙素の分類

語彙素群	語彙素例	1 屈折の種類	2 語幹形で主語・述語	3 語幹形で連体修飾	4 語幹形で連用修飾	5 語幹形の他の特徴
B	B1: XOYOR 二、GURAV(N) 三 B2: OLON 多い、SAJN 良い	II	○	○	○	
C	ADILXAN 同じ、IX 多い	II	○	○	○	B2 も修飾可
D	D1: XAR 黒、ULAAN 赤 D2: TÖMÖR 鉄、DUGUJ 輪	II	○	○	×	
E	NOM 本、GAR 手	II	○	×	×	
F	ÖNÖÖDÖR 今日、ÖGLÖÖ(N) 朝	II	○	×	○	
G	DUNDUR 中間、ALSUUR 遠方	(II)	×	○	○	
H	NAAD こちらの、ARD 後の	(II)	×	○	×	
O	ÖMNÖ 前に、XOOROND 間に	(II)	×	×	○	
J	DEEGÜÜR 上方、DOOGUUR 下方	×	×	○	○	
K	DEED 上の、DOOD 下の	×	×	○	×	
L	DEEŠ 上へ、XUGA ポキッと	×	×	×	○	
M	MAŠ とても、NEN とても	×	×	×	○	B2、C、D1 も修飾可

基準 2 だけを見れば語群は B~F、G~M の 2 つに分かれる。基準 1 を追加すると B~F、G~O、J~M の 3 つになる。基準 3 も考慮に入れれば B~D、E~F、G~H、O、J~K、L~M の 6 つのカテゴリーが認められる。このように、基準の数を増やせば増やすほど語群の区別も細かくなっていく (Harris 1946: 177)。分布分析の厳密な適用は、極論すれば語と同じ数だけの品詞の区別を導きうるのである。実際、Gross (1979) が提示した 1 万 2000 の語彙項目と 600 の

規則からなるフランス語の文法においては、別の語と全く同じ分布を示す語は一つもなく、別の規則と全く同じ範囲の語彙項目に適用可能な規則も存在しない。

また、Taylor (2011: 44ff.) が指摘するように、それぞれの語はそれぞれ特異な振る舞いを見せる。たとえば英語の *fun* は、名詞または形容詞として分類しただけでは捉えきれないさまざまな統語的環境に現れる。

- (1) a. It's no {fun, good, use, joke, big deal} trying to do it.
 b. It wasn't much {fun, good, use} trying to persuade them.
 c. It won't be much {fun, use} for you.

(Taylor 2011: 55)

Fun は一見したところ普通の不可算名詞のようであるが、(1) のような文脈では一般の不可算名詞とは置き換えることができない。*good* や *use* と言った語は (1) の構文の一部では使うことができるが、*fun* と完全に分布が重なるわけではない。

1.2 下位分類と多重分類

このような分布の「ミスマッチ」(Croft 2001: 34f.) によって生み出される膨大な数のカテゴリーを、ごく限られた数の品詞にまとめ上げるための分析としては、下位分類と多重分類の2つがしばしば活用される。これらの分析では、まず、さまざまなカテゴリーに共通して見られるある文法的特徴に着目し、それに基づいて主要な品詞を決定する。その上で、それぞれの品詞に属する語の間に見られる文法的な振る舞いの違いは、その品詞の下位分類として捉える。複数の品詞の文法的特徴を持つ語は、それぞれの品詞に多重に分類されることになる。

例として、表1の語彙素群をまとめてみよう。基準2「語幹形で主語・述語になる」に適合するものを1つの品詞(「名詞」と呼ぼう)として認定することにする。すると、B~Fは同じ品詞に属することになる。これらの語は、基準3「語幹形で連体修飾」に照らして2つのカテゴリーB~DとE~Fに分けられ、「名詞」という1つの品詞の下位分類として記述される。ここで、基準3の重要度を上げて、基準2と基準3の両方を満たすB~Dを「形容詞」、基準2を満たすが基準3は満たさないE~Fを「名詞」としてみることもできる。最初の分析ではB~Dは一つの独立した品詞として、2つ目の分析ではある品詞の下位カテゴリーとして捉えられることになる。この2つの分析のどちらを採用したらよいだろうか。

今度は、基準3「語幹形で連体修飾」を満たす語群を「形容詞」、基準4「語幹形で連用修飾」を満たす語群を「副詞」とすることにしよう。D・H・Kは基準3は満たすが基準4は満たさないから「形容詞」、F・I・L・Mは基準4は満たすが基準3は満たさないので「副詞」に分類することができる。ところが、B・C・G・Jは基準3にも基準4にも適合する語群である。これらをどのように分類したらいいだろうか。一つの分析は、B・C・G・Jを「形容詞」と「副詞」の両方に分類する多重分類法であり、これらの語群は「形容詞」でもあるし「副詞」でもある、と分析する。もう一つの分析は基準3と基準4を関連させて、両方を満たすものを独立した品

詞として認める、というものである。この場合は、多重分類分析よりも品詞の数が増えて、3つの品詞が設定されることになる。どちらの分析がより良いと言えるだろうか。

下位分類・多重分類では、主要な品詞を認定する基準の選択が重要になってくる。この方法の問題点は、さまざまな文法的基準がある中から、品詞認定の基準をどのように選び出したらいいいのかは全く自明でないというところにある。梅谷 (2013) がモンゴル語の品詞分類について述べるように、分析者は「さまざまな基準のうちどれを優先すべきか」という問題を必ず抱えることになる。分布分析自体はこの問題に対する答えを与えてくれない。このような問題を意識しない基準選択に依拠した品詞分類は、かなり恣意的なものにもなりうる (Schachter 1985)。

そもそも、少数の基準を優先させた品詞分類は、優先されなかった文法的基準による細かな一般化や品詞横断的な一般化を覆い隠してしまう (Taylor 1998)。もちろん、伝統的な品詞分類、特に通言語的に見られる名詞・動詞・形容詞といったカテゴリーに関する一般化は重要である。しかし、そうであるからといって、それ以外の一般化が重要でないということにはならない。この論文ではバスク語におけるそのような隠れた一般化を提示してみたい。

2. バスク語の品詞分類

この論文で提示する一般化がおもに関わるのは名詞・形容詞・副詞であるので、バスク語において名詞・形容詞・副詞がどのように分類されてきたかを概観し、その問題点を指摘しておきたい。前述したような、品詞分類をするためには避けることのできない問題が、バスク語の品詞分類にも見られる。

バスク語の品詞分類について体系的な考察を行っている研究は少ない。そのうちでも Zabala (1999) は、単にそれぞれの品詞の特徴を記述するだけでなく、それらをどのように区別したらいいかという問題意識のもと、名詞・形容詞・副詞の分類基準について論じている。彼女の提案する分類は表2のようにまとめられる。

表 2. Zabala (1999) によるバスク語の名詞・形容詞・副詞の分類

	項	連体修飾	述語	連用修飾	例
名詞	+	-	+	-	<i>artzain</i> 「羊飼い」
形容詞	-	+	+	-	<i>lasai</i> 「落ち着いて」
叙述形容詞	-	-	+	-	<i>eginkizun</i> 「義務だ」
副詞	-	-	+	+	<i>ondo</i> 「良く」

Zabala (1999) が用いている分類基準は以下の4つである。

- (2) a. 項の主要部となる
- b. 連体修飾をする
- c. コピュラの補語として述語を構成する
- d. 連用修飾をする

これらの基準を用いて表2のような分類をすることの問題点は3つある。第1に、表2から分かるように、Zabala (1999) の「形容詞」には連体修飾機能を持つ無標の「形容詞」と、もっぱら叙述機能のみを持つ「叙述形容詞」が両方含まれる。これは1節で述べた下位分類分析であり、4つの基準のうち(2a, c, d)を(2b)よりも優先させることによって成り立っている。このような優先順序を設ける根拠は自明ではないように思われるが、Zabala (1999)はこのことについて論じてはおらず、その理由は明らかにされていない。

第2に、分布のミスマッチの問題がある。表2では(2)の基準についてミスマッチが無いかのように整理されているが、実際には次のような例がある。まず、Zabala (1999)自身が認めているように、(2b, c, d)の全てがプラスであるような語群が存在する。

(3) *ariketa erraz=a.*

練習 簡単=SG

「簡単な練習」

(4) *den=ei barka-tze=a ez da erraz=a.*

皆=PL.DAT 許す-NMLZ=SG NEG COP.PRS.A3S 簡単=SG

「皆を許すことは簡単ではない」

(5) *ez duzu oso erraz barka-tzen.*

NEG PRS.A3S.E2S とても 簡単 許す-IPFV

「あなたはあまり簡単には許さない」

これらの例から分かるように、*erraz*は連体修飾、叙述、連用修飾の全ての用法を持っている。Zabala (1999)は*erraz*のような語群を形容詞と副詞の両方に分類することでこの問題を解決している。しかし、この語群を独立の品詞とする可能性については検討していない。

この他に、項の主要部にもなり、連体修飾も可能な語群が存在する。たとえば*urdin*は下の例のように用いられる。このような語群も、表2の分類にとって問題となる分布のミスマッチを生み出す。また、(2)の基準では1つにまとめられているが、コピュラ補語として述語を構成する語群の振る舞いは大きく2つに分けられる。この点については3.1節で詳しく見るが、このような振る舞いの違いを分類基準に加えれば、ミスマッチはさらに拡大する。

(6) *urdin argi=a.*

青 明るい=SG

「明るい青色」

(7) *begi urdin argi=ak*

目 青 明るい=PL

「明るい青色の目」

最後に、品詞分類が語の分類であることに由来する問題がある。一般にバスク語の連体修飾要素は、1語であれば名詞に後置され、複数の語からなる句であれば前置される。従って、表2で形容詞として分類されている語は、名詞に後置される。ところが、名詞に前置することも後置することもできる連体修飾要素も存在する。

- (8) a. *urre=z=ko ile=ak*
 黄金=INST=ADN 髪=PL
 b. *ile urre=z=ko=ak*
 髪 黄金=INST=ADN=PL

例(8a, b)はいずれも「金髪」を表すが、連体修飾要素である *urrezko* は名詞 *ile* の前にも後ろにも置くことができる。この *urrezko* のように名詞前置も名詞後置も可能な連体修飾要素は、音韻的には1語だが統語的には複数の語に分けられるという特徴を持つ。たとえば *urrezko* の場合は名詞 *urre*、素材を表す具格助詞 =z、連体助詞 =ko から構成されている。(9b)のように音韻的に複数の語からなる連体修飾要素は後置することができない。

- (9) a. *urre garbi=z=ko bi lepo kate-txo*
 黄金 純粋=INST=ADN 二 首 鎖-DIM
 「2つの純金のネックレス」
 b. **bi lepo kate-txo urre garbi=z=ko*
 二 首 鎖-DIM 黄金 純粋=INST=ADN

統語的には *urrezko* は一語ではない。すると、品詞分類が語の分類である以上、*urrezko* は表2の形容詞ではありえない。一方、音韻的には *urrezko* は一語であり、表2の形容詞と共通する分布を所以说える。実際、(9) から分かるように、音韻的な一語性は名詞に後置される条件となっている。このような複雑な *urrezko* の地位は、基本的項目の分類としての品詞によってはうまく捉えることができない。

3. バスク語の品詞分類が覆い隠す一般化

この節では、2節で見た品詞分類の問題点のために今まで注目されてこなかったと思われる一般化を提示する。3.1節では、コピュラ補語になりうる要素として形容詞や名詞といった語レベルの要素だけを想定していたことによって見えにくくなっていた、コピュラ補語の形式とその他の文法機能の関連について述べる。3.2節では、品詞分類にとって中心的な基準とはされてこなかった比較構文に着目することで見出せる一般化について述べる。

3.1 コピュラ補語

バスク語のコピュラ文は、絶対格名詞句 X・述語的補語 Y・コピュラ動詞で構成され、Xの指示対象がYの表す属性を持つことを述べる文である。補語 Y が個体レベル述語(恒常的な属

性を表す述語)か、場面レベル述語(一時的な属性を表す述語)かによって、補語 Y の形式が異なる (Zabala 1993, Artiagoitia 1997, Eguren 2012)。前者を個体コピュラ文、後者を場面コピュラ文と呼ぶ。

スペイン方言の主なコピュラ動詞は4つある。このうち、コピュラ動詞 *izan* と *egon* は、英語の *be* と同じように項名詞句を1つだけ要求する。この項名詞句(主語)は絶対格であり、明示的な格標識を持たない。まず、*izan* をコピュラとするコピュラ文の例を見てみよう。

- (10) *ezti=a gozo=a da.*
 蜂蜜=SG 甘い=SG COP.PRS.A3S
 「蜂蜜は甘い」(de Rijk 2008: 36)

- (11) *apaiz isil=ak on=ak dira.*
 司祭 無口な=PL 良い=PL COP.PRS.A3P
 「無口な司祭は良い」(de Rijk 2008: 36)

例(10)や(11)のコピュラ文は、主語の指示対象「蜂蜜」や「無口な司祭」について、それがある種の恒常的な属性(甘い、良い)を持つことを述べている、個体コピュラ文である。補語は主語の単複に応じて形を変える。(10)のように主語が単数であれば *=a* が、(11)のように複数であれば *=ak* が後接する。

これらの例に対して、(12)や(13)は *egon* をコピュラとしている。

- (12) *zuzendari=a apur bat urduri da-go.*
 監督=SG 少し いろいろ COP.PRS.A3S
 「監督は少しいろいろしている」

- (13) *Ikasle=ak ere oraindik urduri daude.*
 教師=PL も まだ いろいろ COP.PRS.A3P
 「教師たちもまだいろいろしている」

これらの文は、主語の指示対象「監督」「教師たち」がある種の一時的な属性を持っていること(ある種の状態にあること)を述べる場面コピュラ文である。コピュラ動詞が *izan* の場合と異なり、補語は主語の単複によらず同じ形である。

これらのコピュラ動詞がいずれも項名詞句を1つしか要求しないのに対して、能格名詞句と絶対格名詞句の2つを項として取るコピュラ動詞も存在する。

このような動詞をコピュラとする2項コピュラ文でも、1項コピュラ文と同じく、個体コピュラ文と場面コピュラ文の区別があり、絶対格名詞句の指示対象がある種の属性を持つことが述べられる。2項コピュラ文と1項コピュラ文との違いは、能格名詞句の存在である。2項コピュラ文の能格名詞句は、話し手または聞き手、あるいは絶対格名詞句の「所有者」を表す。

- (14) *gazte=a duzu.*
 若い=SG COP.PRS.A3S.E2S
 「彼は若い」

- (15) *andre=a leitzarr=a du.*
 妻=SG Leitza 出身=SG COP.PRS.A3S.E3S
 「彼の妻は Leitza 出身だ」(Uztapide, *LEG II*, 15)

例 (14) や (15) のコピュラ動詞は **edun* である。(14) では二人称単数の能格名詞句と一致した形、(15) では三人称単数の能格名詞句と一致した形になっている。(14) の能格名詞句は聞き手、(15) の能格名詞句は「妻」の「所有者」である「彼」を表している。この動詞は *izan* と対応し、個体コピュラ文で用いられる。絶対格名詞句の単複に応じて、補語には =*a(k)* が後接する。

これに対して、一時的属性を表す補語と共起する 2 項コピュラ動詞が *eduki* である。*eduki* は 1 項コピュラ *egon* に対応し、補語は絶対格名詞句の単複にかかわらず形を変えない。

- (16) *Publio=k aita aspaldi=an [...] gaixo zeukan.*
 P.=ERG 父.SG 昔=INE 病気 COP.PST.A3S.E3S
 「Publio の父は、その昔、病気だった」(*TB* 220)

ここまでに概観したスペイン方言の 4 つのコピュラ動詞を、補語の表す属性が恒常的か一時的か、項名詞句が 1 つか 2 つかによって分類すると表 2 のようになる。

表 3. バスク語スペイン方言の 4 つのコピュラ動詞

	個体レベル	場面レベル
項が 1 つ	<i>izan</i>	<i>egon</i>
項が 2 つ	* <i>edun</i>	<i>eduki</i>

一方、フランス方言では、*egon* と *eduki* はコピュラとしては用いられない。補語の表す属性が恒常的か一時的かによらず *izan* または **edun* が使われる。

- (17) *Peio gazte=a da.*
 P. 若い=SG COP.PRS.A3S
 「Peio は若い」

- (18) *Peio urduri da.*
 P. いらいら COP.PRS.A3S
 「Peio はいらいらしている」

フランス方言でも、スペイン方言と同じように、個体コピュラ文では絶対格名詞句の単複に応じて補語に =*a(k)* が後接するが、場面コピュラ文では補語の形は変わらない。このため、ス

ペイン方言でもフランス方言でも、2種類のコピュラ文の形式的区別が可能である¹。

この接語 =a(k) は、いわゆる定冠詞と全く同形であるため、先行研究では、個体コピュラ文の補語に後接する接語 =a(k) の位置づけが問題とされてきた。たとえば、Zabala (1993) は数の一致標識として、Artiagoitia (1997) は限定詞として、Eguren (2012) は代名詞コピュラとして =a を分析している。いずれも生成文法の枠組みで展開されている議論であるが、これらの分析では、個体コピュラ文の補語は名詞と形容詞（を主要部とする句）であるという暗黙の想定がある。

しかし、個体コピュラ文の補語となるのは名詞や形容詞だけではない。通常の項名詞句を構成する様々な句が個体コピュラ文の補語として機能しうるのである。

たとえば、(19) は属格名詞句が個体コピュラ文の補語となっている例である。属格名詞句は(20)のように項名詞句の構成要素となることができる。

- (19) *liburu=ak haurr=a=ren=ak dira.*
 本=PL 子供=SG=GEN=PL COP.PRS.A3P
 「その本はその子供のだ」(de Rijk 2008: 99)

- (20) *Velazquez=en Felipe errege=a=ren bost erretratu=ak*
 V.=GEN F. 王=SG=GEN 五 肖像画=PL
 「Velazquez の Felipe 王の 5 枚の肖像画」

また、後置詞句や副詞句の連体形も個体コピュラ文の補語となる。連体形とは、後置詞句や副詞句などそのままでは連用修飾しかない句に連体助詞 =ko を付加した形のことである。

まず後置詞句から見てみよう。英語の前置詞句と違って、バスク語の後置詞句はそのままでは名詞句に現れることができない。名詞句内で後置詞句を用いるためには、=ko を後接する必要がある（内格後置詞 =an に =ko が後接される場合、=an は削除される）。

- (21) *orain Garazi=n bizi naiz.*
 今 G.=INE 住む PRS.A1S
 「私は今は Garazi に住んでいる」

- (22) *ni Arrosa=ko lantegi=an lan=ean ari naiz.*
 私 Arrosa=[INE].ADN 工場=INE 仕事=INE している PRS.A1S
 「私は Arrosa にある工場に働いている」

¹ ただし、コピュラ動詞が *egon* であり、かつ補語に =a(k) が後接しても容認可能という例が存在する。

(i) *Haur hau lodi(=a) dago.*
 子供 これ 太って=SG COP.PRS.A3S
 「この子供は太っている」(Zabala 1999)

このため、*izan/egon* の選択と =a(k) の有無が、完全に同じ基準で決まっているとは言えない。さらなる調査が必要である。

- (23) *Tren=a Baiona=tik Milafranga=rat joai-ten da.*
電車=SG Baiona=ABL Milafranga=ALL 行く-IPFV PRS.A3S
「その電車は Baiona から Milafranga へ行く」

- (24) *Baiona=tik Milafranga=ra-ko tren=a*
Baiona=ABL Milafranga=ALL-ADN 電車=SG
「Baiona から Milafranga への電車」

このような後置詞句の連体形は個体コピュラ文の補語となる。

- (25) *arrain=ak itsaso=ko=ak dira.*
魚=PL 海=[INE].ADN=PL COP.PRS.A3P
「その魚は海のだ」(de Rijk 2008: 99)

- (26) *mahai=a zur=ez=ko=a da.*
机=SG 木=INST=ADN=SG COP.PRS.A3S
「その机は木製だ」(de Rijk 2008: 99)

このように、形容詞以外の連体修飾句も個体コピュラ文の補語となる。名詞も含めれば、個体コピュラ文の補語は名詞句レベルの随機的要素であると言える。バスク語では名詞句の必須要素として限定詞だけが必要で、名詞は随機的であるからである。

一方で、Zabala (2003) が指摘しているように、場面コピュラ文の補語になるのは名詞や形容詞だけではない。後置詞句・副詞句・連用修飾節なども補語となりうる。

- (27) *Beñat etxe=an dago.*
Beñat 家=INE COP.PRS.A3S
「Beñat は家にいる」(Zabala 2003)

- (28) *Garazi lan=ik gabe dago.*
Garazi 仕事=PRT 無しで COP.PRS.A3S
「Garazi は失職中だ」(Zabala 2003)

- (29) *Amaia zer egin ez daki-ela dago.*
Amaia 何 する.PFV NEG 知る.PRS.A3S.E3S-COMP COP.PRS.A3S
「Amaia は何をしたらいいかわからないでいる」(Zabala 2003)

すると、個体コピュラ文に対して場面コピュラ文の補語になるのは連用修飾句であると言える。名詞や形容詞なども、二次述語となることができるので、場面コピュラ文の補語は節レベルの随機的要素と対応すると言える。

このように、名詞や形容詞以外の補語を見ることで、以下のような一般化が見出せる。

- (30) 個体コピュラ文の補語：名詞句レベルの随意的要素 + 接語 =*a(k)*
 場面コピュラ文の補語：節レベルの随意的要素

特に、名詞句レベルの随意的要素に接語 =*a(k)* が付いた個体コピュラ文の補語は、名詞句と形式上は全く見分けが付かないという点を強調したい。これに対して、場面コピュラ文の補語は、節レベルの随意的要素がそのまま現れる。この構図は、まさに Stassen (1997: 193) の Adjectival N-L switching そのものである。Stassen (1997) は 1 項述語文の意味地図を作成した類型論研究であるが、その中で彼は、「属性」を述べる文が名詞述語文タイプと所在文タイプの 2 通りの表現形式を持つ諸言語があることを述べ、それらには次のような傾向があると指摘している。

- (31) The tendency of Adjectival N-L-Switching
 In a language with nominal-locational switching for adjectives, the nominal option will encode the more time-stable reading. (Stassen 1997: 193)

すなわち、名詞文タイプの形式は、所在文タイプの形式よりも時間的な安定性の高い事態を表す傾向があるのである。このような観点からは、バスク語の個体コピュラ文が個体レベル述語を持ち、かつその補語は名詞句と見分けの付かない構造を持っているということ、それに対する場面コピュラ文の補語が所在文の補語と同じ節レベルの随意的要素であるということ、単なる偶然として無視することはできない。つまり、名詞や形容詞といったカテゴリーがいろいろな言語に見られるように、バスク語の個体コピュラ文の補語が名詞句的、場面コピュラ文の補語が連用修飾句的であることも、通言語的に見られる現象の一つとして位置づけられるということである。

3.2 比較級

バスク語のいわゆる形容詞・副詞は、比較構文の述語となる際に接尾辞 *-ago* の付加された特別の形式を取る。この語形を比較級と言う。

- (32) *zu orain zare-n=a baino gazte-ago zen.*
 2SG 今 COP.PRS.A2S-REL=SG より 若い-CMPR COP.PST.A3S
 「彼女は今のあなたよりも若かった」(Oñederra, 141)
- (33) *balinba ba=da hauk baino bekhatu haundi-ago=rik*
 きっと AFF=ある.PRS.A3S これ.PL より 罪 大きい-CMPR=IDF
 「きっとこれよりも大きな罪がある」(Axu, 211)
- (34) *Zu=re lagun=ak gu baino goiz-ago esna-tu dira.*
 2SG=GEN 友達=PL IPL より 早く-CMPR 目覚める-PFV PRS.A3P
 「あなたの友達は私たちよりも早く目覚めた」(Hualde & Ortiz de Urbina 2003)

興味深いことに、この接尾辞 *-ago* は、異なる品詞に分類される様々な語に付加することができる。たとえば、一般に名詞に分類される *gizon* 「男」、*azeri* 「狐」のような語も接尾辞 *-ago* を取って比較構文に現れることができる。

- (35) *ni baino gizon-ago porta-tu haiz.*
 1SG より 男-CMPR 振る舞う-PFV PRS.A2F
 「お前は私より男らしく振る舞った」(Amuriza, *Hil* 197)

- (36) *azeri=ak ber=ak baino azeri-ago=ak dira.*
 狐=PL 自体=PL より 狐-CMPR=PL COP.PRS.A3P
 「彼らは狐そのものより狐らしい (=ずる賢い)」

他に、*=ra* (向格助詞) や *kontra* 「～に対して」のような後置詞も比較級の形を持つ。

- (37) *han=dik aitzinago joan behar dut.*
 そこ=ABL 前.ALL.CMPR 行く.PFV 必要 持つ.PRS.A3S.E1S
 「そこからさらに前に進まなければならない」

- (38) *sekula baino elkarr=en kontrago daude.*
 いつも より 互い=PL.GEN 反対して.CMPR いる.PRS.A3P
 「いつもより (激しく) 互いに反対しあっている」

さらに、動詞の不完了分詞にも *-ago* が付く場合がある。例 (39) のように、*joan* 「行く」が状態変化を表す動詞の不完了分詞を取って「だんだん～して行く」のような意味を表す構文では、不完了分詞に *-ago* を付加することが可能である。

- (39) *herri=ak txipi-tzen eta zahar-tzen-ago joa-te=an*
 人口=PL 縮小する-IPFV そして 老化する-IPFV-CMPR 行く-VN=INE
 「人口が縮小し、だんだん老化して行くのと同時に」

これらの例から分かるように、接尾辞 *-ago* は形容詞、副詞、名詞、後置詞、動詞に付加されうる。しかし、どのような語でも比較級を形成できるわけではない。たとえば「独身の(人)」を表す *ezkongabe* に接尾辞 *-ago* を付けた形は容認されない。これはもちろん、独身であることに程度性が見出される文脈が考えにくいためであると考えられる。比較級は、二者をある尺度に照らして比較し、一方を他方より上位に位置づけるために用いられる語形である。そのため、*ezkongabe* のような程度性を見出しにくい語の比較級は容認されないのである。

逆に言えば、バスク語では程度性を意味に読み込むことのできる語であれば、品詞にかかわらず比較級を形成することができる、ということである。まず、(32, 33, 34) で見たような形容詞や副詞 (*gazte* 「若い」、*haundi* 「大きい」、*goiz* 「早く」) が表す属性は、その程度を問題にすることができるようなものである。たとえば若さについて言えば、若いものと若くないものが

截然と分かれているわけではなくて、その間には「非常に若いというわけではないが若くはないとも言えない」とでも言うべきものが存在する。また、若さのある側面は年齢で計り、比べることができる。

例 (35, 36) の名詞も同様である。gizon 「男」や azeri 「狐」と言った概念には、一見、程度性は存在しないように思われるかもしれない。しかし、これらのカテゴリーがプロトタイプ性を持つと考え、接尾辞 *-ago* の付加の自然さが明らかになる。ヒトの概念理解には、あるカテゴリーの成員を他のものから区別することだけではなく、そのカテゴリーのより典型的な成員とそうでない周辺の成員を区別することも含まれている。たとえば「男」というカテゴリーには、より典型的な「男らしい」成員や「男くさい」成員が一方に存在し、他方にはあまり典型的でない成員が存在する。つまり、あるプロトタイプ・カテゴリーに属する成員同士は、どれだけプロトタイプに近いかで比較することができる。そのために、接尾辞 *-ago* の付加が可能になるのである。特に (36) の例が分かりやすいが、*azeri*ago における *azeri* は、「典型的な狐のようにずる賢い」といった意味を表しており、その前に出てくる *azeri* 「動物の1種としての狐」とは意味がずれている。*azeri* の持つ典型的な通念の1つである「ずる賢さ」が比較の尺度として選ばれることで、比較が可能になっていることが分かる。

この点に関連して、いわゆる名詞が比較級の形を取る場合、述語的補語・二次的述語の位置に現れるのが普通で、項名詞句の主要部となることは稀である。述語としての名詞は、何らかのものがあるカテゴリーに属することを表す。このために、述語的に用いられた場合はそのプロトタイプ性がより喚起されやすく、比較級が使われやすいのではないだろうか。

例 (37) の *aitzinago* 「より前へ」、(39) の *zahartzenago* 「より老いて」の例では、どちらも段階的な変化（移動・状態変化）を表しており、その変化の程度がさらに進むことを比較級が表している。(38) では、反対する項目の数や主張の強硬さの程度が比較されている。

結局、接尾辞 *-ago* がこれらの語に適用可能な根本的な理由はその意味に程度性を見出すことができるかということであって、動詞を除けば品詞の差はほとんど関係がない。Lafitte (1978) や Hualde & Ortiz de Urbina (2003)、de Rijk (2008) といった先行研究では、比較級がどのような品詞の語にあるかということだけが述べられているが、伝統的な品詞分類の基準よりも、程度性の有無の方が接尾辞 *-ago* の可否にとって重要なのではないだろうか。

4. まとめ

伝統的な品詞は、言語について語るときには欠かせない、便利なカテゴリーである。それは、ある語がある品詞に属することが分かれば、その品詞を定義する文法的諸特徴をその語が持つことが予測できるからである。しかし、現実にはこの予測が成り立たないこともしばしばある。品詞を細かく分ければ分けるほど予測の精度は上がるが、細かすぎる分類は分類していないのと同じことになってしまう。

実用的には、つまり、便利な符丁としては、ある程度の予測精度と多すぎない数のカテゴリーを設定したい。さらに、学問上妥当な概念として品詞を設定するのならば、このようなカテ

ゴリーが話者の知識として存在するのか、という問いに答えることが重要である。たとえ存在しないにしても、Croft (1990: 188ff.) のように類型論的観点から品詞の普遍性を探求し、どのような文法的特徴が1つの語によって担われやすい (担われうる) のかを問う、という道もある。

このような研究の前提として、そもそもある語がどのような分布をするのか、逆に言えば、ある文法的環境にどのような語が現れうるのかを明らかにしなければならない。この際に、伝統的な品詞分類にとらわれて、その環境に現れうる品詞を列挙するだけでは不十分であろう。個体コピュラ文と場面コピュラ文の補語に、随意的要素として現れる環境の違いがあったように、あるいは比較級になりうる語の意味に程度性が含まれていたように、品詞を越えた何らかの共通点が、その環境での生起を動機づけているという可能性を検討する必要がある。

略号一覧

Leipzig Glossing Rules (<https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/LGR08.02.05.pdf>) に載っていないもののみを挙げる：1S 一人称単数の一致、1P 一人称複数の一致、2F 二人称単数親称の一致、2S 二人称単数の一致、3S 三人称単数の一致、3P 三人称複数の一致、A 絶対格項の一致、CMPR 比較級、E 能格項の一致、FAM 親称、PRT 分格冠詞、TERM 終点格後置詞

参考文献

- 梅谷博之 (2013) 「モンゴル語の名詞・形容詞・副詞の区分」『日本言語学会第147回大会予稿集』338-343. 日本言語学会。
- Artiagoitia, Xabier (1997) DP predicates in Basque. *University of Washington Working Papers in Linguistics* 15: 161–198.
- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.
- Croft, William (1990) *Typology and universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2001) *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- de Rijk, Rudolf P. G. (2008) *Standard Basque: A progressive grammar*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Eguren, Luis (2012) Predication markers in Basque. In Etxebarria, Urtzi & Etxepare, Ricardo & Uribe-Etxebarria, Myriam (eds.) *Noun phrases and nominalization in Basque: Syntax and semantics*, 243–265. Amsterdam: John Benjamins.
- Gross, Maurice (1979) On the failure of generative grammar. *Language* 55: 859–885.
- Harris, Zellig S. (1946) From morpheme to utterance. *Language* 22: 161–183.
- Hualde, José Ignacio & Ortiz de Urbina, Jon (2003) Comparative construction. In Hualde, José Ignacio & Ortiz de Urbina, Jon (eds.) *A grammar of Basque*, 823–833. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lafitte, Pierre (1978) *Grammaire basque (navarro-labourdin littéraire)*. Edition revue et corrigée.

Bayonne: Elkar.

- Schachter, Paul (1985) Parts-of-speech systems. In: Shopen, Timothy (ed.) *Language typology and syntactic description I: Clause structure*, 3-61. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stassen, Leon (1997) *Intransitive predication*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (1998) Syntactic constructions as prototype categories. In: Tomasello, Michael (ed.) *The new psychology of language: Cognitive and functional approaches to language structure*, Volume 1, 177–202. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Taylor, John R. (2011) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Zabala, Igone (1993) *Predikazioaren teoriak gramatika sortzailean (euskararen kasua)*. Leioa: Euskal Herriko Unibersitatea. (Doctoral dissertation)
- Zabala, Igone (1999) Gramatika-kategoriak eta EGLU. *Euskera* 44: 865-896.
- Zabala, Igone (2003) Nominal predication: copulative sentences and secondary predication. In Hualde, Jose Ignacio & Ortiz de Urbina, Jon (eds.) *A grammar of Basque*, 426–447. Berlin: Mouton de Gruyter.

Generalizations Masked by Traditional Parts of Speech

ISHIZUKA Masayuki

noitartsinimda@gmail.com

Keywords: Basque, parts of speech, adjective, copular sentence, comparative

Abstract

Traditional parts-of-speech analysis, characterized as lexical categorization according to distribution, has a serious problem whose root is the distributional analysis itself. Usual measures to cope with the problem, i.e. subclassification and multi-membership, force analysts to choose a portion of various grammatical criteria, often without clear basis. This situation tends to hide low-level and/or cross-cutting generalizations.

In this paper I present two of this kind of hidden generalizations in Basque: (1) copulative complements of individual-level predicates have a different form from those of stage-level predicates. Individual-level complements have the same form as adnominals, while stage-level complements are the same in form as adverbials or depictives; (2) the comparative *-ago* can be suffixed to adjectives, adverbs, nouns, postpositions, and even verbs. Whether or not a given word can be accompanied by the comparative suffix depends on whether its meaning can be construed as gradable.

(いしづか・まさゆき 東京大学 日本学術振興会)